

いちごの産地間競争と産地組織の機能

高尾雅晴・黒川幸彦(佐賀県農業試験場)

Masaharu TAKAO and Yukihiko KUROKAWA: Functions of Sectional Meeting under Competition of Strawberry-growing Districts

1. はじめに

いちごの産地間競争の現局面の特徴は、市場が満杯化し消費ニーズが多様化した中で、産地が次々に商品開発、差別化を図り、市場での地位を維持・拡大していく競争になっていることである。商品開発、差別化のポイントは、(1)食味、(2)出荷時期、(3)品質、(4)販売様式となっており、競争力の基軸は産地の生産力要因だけでなく、組織力要因が大きなウェイトを占めるようになっている。本稿では、産地の組織力要因に注目し、佐賀県のいちご主産地である東与賀町を対象として、いちご産地の再編を行う場合の農協いちご部会の機能について検討する。

2. いちご部会の役割

佐賀中部平坦水田地帯に位置する東与賀町は、佐賀県の中で4番目にいちごの作付面積規模が大きい産地で、佐賀県のいちごの産地形成をリードしてきた地域である。

町内には未合併農協の東与賀町農協があり、'86年の農協のいちご部会員数は70戸、栽培面積は19.3ha、販売量は631.5tである。また、この産地の特徴は、1戸当たり栽培面積が28aで、県平均面積17aの1.6倍と大きいことであり、さらに、平均単価も県内の農協の中でもトップ水準にあることである。

東与賀町の産地の発展過程を整理すると、4つの時期に区分することができる。第I期は'67年~'70年の模索期、第II期は'71~'78年の拡大期、第III期は'79年~'82年の停滞期、第IV期は'83年以降の再編期である。

この間に、いちご部会は、(1)集出荷の担い手、(2)産地の経営戦略の策定者、(3)品質管理の担い手、(4)技術革新・情報管理の担い手、(5)生活・健康問題への取組みを行うようになってきている。現在の産地間競争のなかでは、(2)~(4)の役割が非常に重要になってきている。

3. 産地の経営戦略の策定者

東与賀町では産地形成の当初より、部会が中心となって産地の経営戦略を策定している。具体的には、部会への新規加入農家の資格として、(1)導入ハウス実面積は450坪以上であること。(2)経営主の年齢が50歳以下の専業農家、但し、後継者がいる場合は55歳までであること。(3)いちご導入前の1年間は既存部会員のところで研修を受けることを条件としている。これは無秩序に生産を拡大するのではなく、いちご生産の担い手(自営経営農家)を明確にした産地形成を進めてきたことを意味する。また、部会の20周年記念大会ではスローガンの中

に、1戸当たりのいちご販売高1,500万円の実現という所得目標を打出し、経営の方向性を提示している。

4. 技術革新・消費者ニーズの情報管理と品質管理

東与賀町農協のいちご部会は、再編期における技術革新・消費者ニーズの情報管理の点で大きな役割を果たしている。具体的な成果の第1は、部会のリーダーらが中心となって、新品種に関する情報の探究、収集及び試験的検討を行い、日持性が良く良食味の「とよのか」を見出したことである。また、県内でいち早く品種の統一的な転換を行うことによって、産地評価を高めると共に出荷時期の拡大が可能となり、産地の建直しを実現している。その第2は、株冷や夜冷技術といった革新技術を試験的に行う農家には、部会が若干なりとも金銭的な援助を行い、その結果を部会員に紹介してもらい、産地技術として活用するための検討である。その中で、株冷や夜冷技術の普及は出荷開始時期を従来のクリスマスから七五三の時期へ前進させ、部会はそれを大手スーパーとの相対取引へと結び付けて、産地の差別化要因を拡大している。また、一段詰めパックの導入によって、付加価値の形成をめざしている。

部会は品質管理面でも重要な役割を果たしている。新規加入農家の研修制度の他に、(1)生産段階では、施設ハウスの設置方向や品種、定植・着果様式を統一して、栽培管理技術の平準化を行い、(2)集出荷段階では、品質規格やパック詰め様式を統一する他に、生産者自らが厳しい品質管理を行う自主検査システム(没収制度を伴う)を採用し、産地体質の強化に努めている。

5. 部会組織の構造と機構

いちご部会の組織構造の特徴は、(1)縦組織としては、部会組織-集落座談会-部会員となっており、とくに集落座談会は部会への意見の吸い上げや部会員間の意思疎通と情報交換の場となっている。(2)横組織としては、集落を単位として、部会員10戸程度からなる小集団を組織し、部会員相互の連携を強化している。小集団活動の具体的内容は、①部会員間の技術の交流、②生産段階の統一技術の確認、③革新技術の検討である。さらに、横組織としては、いちご農家が集落を越えて行う、いわゆる同世代の親睦会である三夜待があり、そこでの情報交換も技術の平準化に役立っている。